

# 生きる水

聖靈による刷新のために

2024

秋季号

No.154

## 収穫の主

全国コムニオ奉仕会 コーディネーター 小熊晴代

猛暑とゲリラ豪雨と乱立するユスリカの蚊柱に恐れをなして「お祈り散歩」から遠ざかること三ヶ月、ようやく秋の訪れを感じるようになつた9月の末に近所の川沿いの遊歩道に向かいました。秋空の下、屋根のない世界は生命に満ちていました。遊歩道と並行して流れる川は背高なヨシやマコモに覆われて水面がほとんど見えませんが、わずかな隙間から瑠璃色の生き物が飛んでいくのが見えました。たまにしか会えないカワセミです。枯れ姿のススキやセイタカアワダチソウの間に赤いヒガンバナや黄色いヤナギバヒマワリが見え隠れします。

川の両側に広がる田んぼでは、すでに稲刈りが終わった所がいくつもありました。残された切り株からは青々としたひこばえがまっすぐ伸びています。ちょうど稲刈り中の田んぼもありました。こちらで稲穂の頭です。その数は30羽を超え、大家族です。農家さんがコンバインのエンジンをかけると、一瞬驚いたように羽を広げて低空飛行をしますが、すぐにコンバインが通過した後の地面に降りてきて、何かをついばみます。隠れていたバッタやカエルなどのごち

そうにありついているようです。

私が冷房の効いた部屋にこもっていた夏の間、あの米農家さんはおそらく何度も田んぼに足を運んで自分の目で稲の成長を確認し、綿密な準備や手入れをしながら収穫の日を待っていたのでしょう。「農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです」（ヤコブ5・7）。

戦争、自然災害、詐欺、いじめ、心の病。荒廃が広がるばかりに見えるこの時に、イエス様の声が響きます。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のため働く手を送ってください」と、収穫の主に願いなさい」（ルカ10・2）。聖靈の雨は大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与えます（イザヤ55・10参照）。

二〇二一年十月に教区ステージから始まつた世界代表司教會議（シノドス）第16回通常総会は、10月2日から27日まで、今まさにローマで開催中のシノドス総会第二会期で終結します。聖靈がこれからもたらしてくれる豊かな実りを収穫する忠実で喜びに満ちた働き手として、同じ聖靈によつて私たちが日々新たにされますように。

## ☆ 目 次 ☆

巻頭文・収穫の主（小熊晴代）	1
聖靈の夏作業	
一マゼランの上陸地とオタクの聖地で	2
「祈りの集いリニューアル」研修会に参加して	
（岡園優子、植田迅、簡崎恩、菊地彩衣）	4
アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議に参加して	
（神保恵）	6
故・川村昕司神父様を偲んで（金子知香子）	8
ミサの中にある聖靈降臨の靈性（畠基幸神父）	9

## 発 行

聖靈による刷新

全国委員会

編集委員

中村 友太郎

益田 薫

購読料(送料込み年1600円)

## 購読申込み・振込み先

〒 141-0021

東京都品川区上大崎2丁目

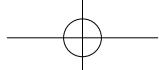
10 - 34 - 2 - 312

聖靈による刷新全国委員会

Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878

口座名 聖靈による刷新全国委員会



## 聖靈の夏作業

### マゼランの上陸地とオタクの聖地で

全国コムニオ奉仕会「コーディネーター 小熊晴代

#### マゼランの上陸地、セブで

7月24日～26日、フィリピンのセブ市でカリスのアジア・オセアニア大陸コムニオ奉仕会コーディネーティングチームの会議が開催され、私もメンバーの一人として参加しました。これは、二〇一九年六月にカリス発足後、新型コロナウイルス感染のパンデミックで延期された対面式のアジア・オセアニア大陸コムニオ奉仕会の会議が昨年二〇二三年の三月にマレーシアのコタキナバルで開催された際、各国とミニストリー部門の参加者約20名からコーディネーティングチームとして選ばれた11人が初めて集まつた定期会議でした。

フィリピン中部のセブ島に位置するセブ市は北部の首都マニラに次ぐフィリピン第二の都市で、大航海時代の探検家、マゼラン上陸によるフィリピンでのキリスト教発祥の地です。24日、成田空港からの直行使で5時間半、私もセブ島に初上陸しました。会場のセブ・クインセンティアル・ホテルに到着しました。このホテルはカリス・フィリピンのコムニオ奉仕会コーディネーター、フェ・バリノさんが経営しており、ホテルの名前もキリスト教発祥五百周年が由来で、館内の装飾も信仰にあふれたものばかりでした。インドのシリル・ジョンさんをはじめ続々到着する参加者と共に、初日の夕方はセブ大司教区のホセ・パルマ大司教様を表敬訪問、ご私邸で夕食をご馳走になりました。

二日目、25日の午前は、フィリピンの契約共同体の信徒リーダー、ジュン・クルス氏指導で、二〇二二年に開催されたFAB（アジア司教協議会連盟）50周年記念総会の最終文書、「アジアの諸民族としてともに旅す」と題された『』から選ばれた主要テーマをもとに、シノドスにならって「キリストによる会話」をしました。午後は、今年の4月に改訂されたカリスの規約について説明がありました。一つは、アジアとオセアニアが分割されて個別の大陸コムニオ奉仕会を形成すること。これで従来の4大陸からアフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、オセアニアの5大陸となりました。つまり、今日はアジア・オセアニア大陸のコーディネーティングチームとして最初で最後の会議となりました。もう一つの変更は、ユースの各国代表の年齢制限が30歳未満から35歳未満に引き上げられたことです。夕方にはマゼランが建てた十字架や幼きイエス像があるフィリピン最古の教会、サントニーニョ教会でミサに与りました。

最終日の26日、午前には今後も神保恵くんが参加）、午後から合同で賛美と交流をし、ミサに与りました。司式は来日して默想指導をしていただいたこのあるバート・パスター神父でした。80代の現在もカリスマ・セアニア大陸の司教として活動しておられ、心臓の手術を受けた後はとても元気になられました。ミサ後は歌や踊り満載の明るく賑やかな夕食会、フィエスタ・フィリピノでお開きとなりました。小さなサンタニニョ像やカリスのロゴ入りグッズをたくさんお土産にいただいて、26日に帰国しました。

キリスト教とカトリックカリスマ刷新の歴史や経緯や規模がフィリピンと日本とでは違うとは言え、今回はカリス・フィリピンの司教団との密接なつながりと、とくに空港の送迎から夕

年の二〇二五年四月にローマで開催される主要イベントの説明がありました。この日はアジア・オセアニア大陸のユースリー・ダーカー会議の初日であり（日本からも神保恵くんが参加）、午後は、今年の4月に改訂されたカリスの規約について説明がありました。一つは、アジアとオセアニアが分割されて個別の大陸コムニオ奉仕会を形成すること。これで従来の4大陸からアフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、オセアニアの5大陸となりました。つまり、今日はアジア・オセアニア大陸のコーディネーティングチームとして最初で最後の会議となりました。もう一つの変更は、ユースの各国代表の年齢制限が30歳未満から35歳未満に引き上げられたことです。夕方にはマゼランが建てた十字架や幼きイエス像があるフィリピン最古の教会、サントニーニョ教会でミサに与りました。

食会の踊りに至るまで協力してくれた多数の契約共同体の質・量両面で豊かな人材力を目の当たりにし、圧倒されるばかりでした。

### オタクの聖地、秋葉原で

日本でカリスを代表する私たち小さな群れも、日本で与えられている使命を果たすべく、聖靈の声に聞き従いながら「祈りの集い研修会」を8月23日～24日に開催しました。パンデミックが収まつてから徐々に再開している、あるいは再開を望んでいる対面式の祈りの集いに必要な糧を研修会という形で提供するよう促されたからです。テマは、「祈りの集いリニューアル！ 力と愛と思慮の靈によって」、場所は二〇一八年にオーストラリアからマリー・アン・ゲーテンビーさんを招いて開催した執り成し研修会と同じ、秋葉原のビルの7階にあるレンタルスペースです。宿泊の必要な参加者は各自で場所を確保する必要がありましたが、両日とも北海道



参加コーディネーターとバート神父



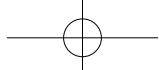
セブ大司教区 パルマ大司教様と



ダンサーもリーダーたちもサントニーニョを揚げて踊りました



マゼラン・クロスと共に



から関西の奈良県、大阪府まで、50名強の参加者がありました。現時点で祈りの集いを開催している東京の初台教会、松戸教会、ユースグループ、名古屋の南山教会グループが賛美を担当し、全国コムニオ奉仕会コアグループのメンバーが4つのテーマで講話を担当しました。23日は畠神父様が「聖靈降臨」「パンテコステ」の文化について、私が「カリスを通して聖靈が行つておられること」について話しました。24日には、中村友太郎さんが日本のカトリック聖靈による刷新のごく初期に招かれて培ってきた主との交わりを通して祈りの集いの恵みを分かち合いました。今回も賛美リーダーとして恭子夫人と共に大活躍だった秋元伸介さんは、「聖靈の賜物、とくに言葉の賜物」について明確な教えを与えてくれました。この4つの講話の内容については、今号から始めて順次こちらに掲載していく予定です。

24日の派遣のミサ後は茶話会で参加者同士が分かち合いできる時間をお楽しみください。

時間をもうけ、今回の研修会で学んだことを覚えているかどうかのクイズも秋元先生から出題され、なごやかな雰囲気でお開きとなりました。後述の参加者の証しからも聖靈の祝福が伝わってくると思います。

## 「祈りの集いリニューアル」研修会に参加して

奈良・登美ヶ丘教会 ルチア岡園 優子

口 \* 天が開き恵みが今ふりそそぐ \* (くり返す)

主をほめたたえ喜び歌おう  
新しい歌を主にささげよう □  
(神は愛・69番)

今回の研修会に導いて下さったのは主からの特別な贈り物でした。浅草橋にある古いビルの七階、ドアを開けると何とそこは、素晴らしいキリストの香り、天国の香りに満ち満ちています。

たくさんのお悩み、悲しみを抱え涙と共にたどり着いた私を、主はやさしく迎え入れて下さいました。そして、若い人達の力強い賛美と共に、いつしか罪人はいけない、聖靈のやさしく力

研修会が始まる前に会場で奉仕者だけで祈ったとき、「57年前のデュケイン・ウイークエンドのように、これはアキバ・ウイークエンドになる」という預言がありました。今や世界的に名高い秋葉原で灯された聖靈の

火をそれぞれの教会でも家庭でも「らしからぬ所」でも新たに灯することができますように。私が最近よく口ずさむ歌のように、「権力によらず、能力によらず、わたしの靈によって」、愛と力の思慮の靈によって。

の私を高間へと導いて下さったのです。東京のこの場所に聖靈のいぶきを降り注いで私達を祝福して下さいました。賛美の中、スクリーンに写し出された大きな十字架、このイエス・キリストの十字架によつて赦され癒されたのです。主に心から感謝致します。

帰りの新幹線の中では、イエス・キリストのやさしい温もりに抱かれ、身も心も若返つたような思いでした。二日間、本当にありがとうございました。

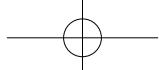
また、畠神父様、秋元様、小熊様、中村友太郎様のご講話をお聞きして、聖靈の素晴らしさをあらためて知ることができ勇氣を頂きました。

八月東京での研修会に参加して  
カトリック旭川六条教会

植田 駿

聖靈を愛し、親しく交わることを恐れてはいけない、諦めてはいけない、聖靈のやさしく力

去る8月23日（金）東京秋葉原での祈りの集い研修会、翌24日（土）カトリック初台教会でのアルファコースの研修会を夫



婦で受けて参りました。私たち  
は北海道旭川市在住のカトリック信者です。旭川の祈りの集い  
は一九七七年より、またアルファコースは二〇〇九年より行わ  
れていますが、四年前のコロナ禍のため、近年はリモートで行  
つておりました。二日間贊美の歌を対面で歌い、神父様や講師  
の皆様の講話を拝聴し、改めて聖靈の満たしの重要性を痛感致  
しました。そして渴いている自分を認識出来ました。

今回の研修を受け、早速対面によるアルファコースの再開を決意し、10月5日（土）より旭川の六条教会にて行うことになりました。実は、コロナも落ち着いてきたので、そろそろ対面のアルファコースをと考えていましたが、その際飲食は省こうと思っておりました。三年間のリモートに慣れたこともあり、アルファコースにおける飲食にさほどの重要性を感じなくなつて、いたからです。

しかし、アルファコース研修の時、牧師先生の講話で「共に

は北道旭川市在住のカトリック信者です。旭川の祈りの集いは一九七七年より、またアルファコースは二〇〇九年より行われていますが、四年前のコロナ禍のため、近年はリモートで行つておりました。二日間贊美の歌を対面で歌い、神父様や講師の皆様の講話を拝聴し、改めて聖靈の満たしの重要性を痛感致しました。そして渴いている自分を認識出来ました。

飲み、食べることは、私たちが考へている以上に、靈的な行為なのです」と言う言葉に衝撃を受け、私たちが大きな間違いを犯していることに気付きました。10月からのアルファコースでは、気持ちも新たに、みんなで食卓を囲み、大いに神様について、聖靈について語り合い、深い分かち合いをしたいと思います。

### 贊美チームの奉仕に招かれて

簡 琦恩

聖靈の招きに答えてよかつたと思ひます。

私は信仰の弱い人だと思つてゐますので、いつも贊美リーダーを頼まれる時、不安が伴つて、この贊美は皆が神様により近づけたのかと疑問を抱いています。

感覚だけに頼つての贊美ではなく、基盤としての知識があつた上での贊美リードをしたかったのです。この默想会のテーマが分かる前、講話の中に贊美についての教えがあると聞いていた瞬間、

だと心が叫びました。

秋元さんの講話の中で、贊美、感謝、礼拝の流れを聞いて、これから贊美リーダーを頼まれた時、選曲の順番などにはもう迷はないと自信を持つて自分に

言えるようになりました。良い先生は学生に知識を教えた後に知識で実践できるかどうかの検証場を設けてくれます。イエス様は良い先生であり、すべては計画されていました。

贊美についての講話の翌日に私を含めユースグループは一つの贊美をリードすることになりました。この贊美の中、聖靈の触れを感じて、恵まれている喜びと神の偉大さに体のふるえが止まらず涙も溢れ出そうとしていました。

からしの種に変わらないほど小さい信仰しか持つていらない私も、イエス様は呼びかけてきました。私はその招きに答えを

改めて感じました。私は、最近のことですが、主の前に沈黙が必要だと感じて、ただ話さないと言う沈黙ではなく、心の沈黙がなかつたよう気がしていました。

今回の研修での秋元さんの講

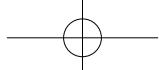
話でもありましたが、日々、少しでも聖書に触れるというは本当に大切なことで、その聖書の箇所を静かに默想する、そんな日々を送っていた時の私の心はもっと静かで穏やかだつたな、神様に真っ直ぐだつたと思い出しました。

日常の本当に小さなことも今、私がここにいることさえも奇跡だと神に感謝して喜びのうちにすごす、これこそ刷新の第一歩、主に触れ、近づきたいと思うこと、それがまず第一歩だつたと改めて感じました。

神さまと向き合うというのは心の静けさからで、心の静けさは神さまの言葉、つまり聖書の中にあることを日々忘れずに過ごしていきたいと思います。

### 8月研修会の感想

菊地彩衣



# アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議に参加して

全国コムニオ奉仕会ユース代表 神保 恵

7月26日（金）～7月28日（日）の3日間、第一回カリス・アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議がフィリピンのセブ市において開催されました。参加者は各国を代表し集まつた二十代から三十代の若者達で、参加国は台湾、韓国、シンガポール、インドネシア、マレーシア、インド、フィリピン、ニュージーランド、日本でした。プログラムは各国シニアリーダーとユースによる交流や、それぞれの地域での活動と現状の報告がありました。ここ数年パンデミックの影響も受けて各国の集いの状況も大きく様変わりしたようです。その間に結婚して家庭を持った若者たちが集いをお休みしましたままになつたり、仕事の影響で離れてしまう人もいたようです。しかし、そのような中でもフィリピンとインドは集いに参加する人が増えています。そ

して現在のカリス・ユースは新しい局面に入り、各地の集いを再編成して合同で開催したり、これからは各国でもより協力し合う方向に向かっています。そのような流れから、去る9月27日～29日に日本と台湾のユースによる合同黙想会が初めて台湾で行なわれました。これについては次号で報告させていただきます。

また、今回のユース会議では癒しの証しがたくさん聞けましたので、それを分かち合いたいと思います。それは各国の若者がどうして聖霊による刷新に参加するようになつたかというテーマの中でした。

①男性参加者の証し。男性の家族はもともとヒンズー教徒でした。ある時、彼の父親が仕事の事故が原因で下半身麻痺になつてしましました。そんな時にカトリック聖霊による刷新の方

と出会い、回心して洗礼を受けました。その後、母親が末っ子である彼（今、証しをしている男性）を妊娠中に胎内で脳が形成されていない事が判明し、医師からこのままではこの子は生きられないからと墮胎を勧められました。しかしそれを拒否し両親は脳がつくられるように神様に祈り続けました。そしてその子は脳がある健康な状態で生まれて今みんなの前で証しをしてくれているのです。そしてその男性の兄も信仰を育みアウェスチノ会に入会したそうです。

②男性参加者の証し。彼は子供の頃に半身不随で一生歩けないと診断されましたが、聖霊による刷新に参加し、祈りによって、この状態を賛美し続けました。今では奇跡的に回復し、自分で歩けるようになつたと証してくれました。

③女性参加者の証し。彼女は

10代で妊娠して、誰の助けも得られなかつたそうです。孤独と不安の中で子供を産み育てる中で聖霊による刷新と出会い、希望を持つて生きることができるようになり、今では夫や生まれた子供も贊美チームに参加しているという証しでした。

これらは思わず主に贊美と感謝を捧げたくなるような証しでした。彼らの話を聞いていると、戻つて来たサマリア人のように癒やされて主を贊美するために思えます。イエスは身体の癒しと靈の救いも与えてくださいました。そんな彼らに共通している事は、家族や親戚や身近な人が聖霊による刷新に関わっている方が多かつたという点です。彼らから影響を受けて聖霊による刷新の集いに参加するようになったとのことでした。ですから今回参加者の中には親子、兄弟姉妹、夫婦、幼馴染、従兄弟同士などが含まれていました。これは日本のユースメンバーでも同じことが言えます。

「いつも喜んでいなさい。絶

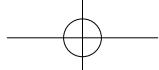
えず祈りなさい。どんなことに  
も感謝しなさい。これこそ、キ  
リスト・イエスにおいて神があ  
なたがたに望んでおられること

です。靈の火を消してはいけま  
せん」（一テサロニケ5・16～  
19）。このように主のために働  
いているユースたちに聖靈の息

吹と希望を感じました。今回集  
まつたユースたちにとつて、そ  
れぞれ置かれている状況や場所  
が違うけれど、主への賛美の内

に聖靈による一致を力強く感じ  
ることができた会議となりまし  
た。





## 故・トマス・アクイナス川村昕司

**金子 知香子（いやしのためのミサ・世話役）**

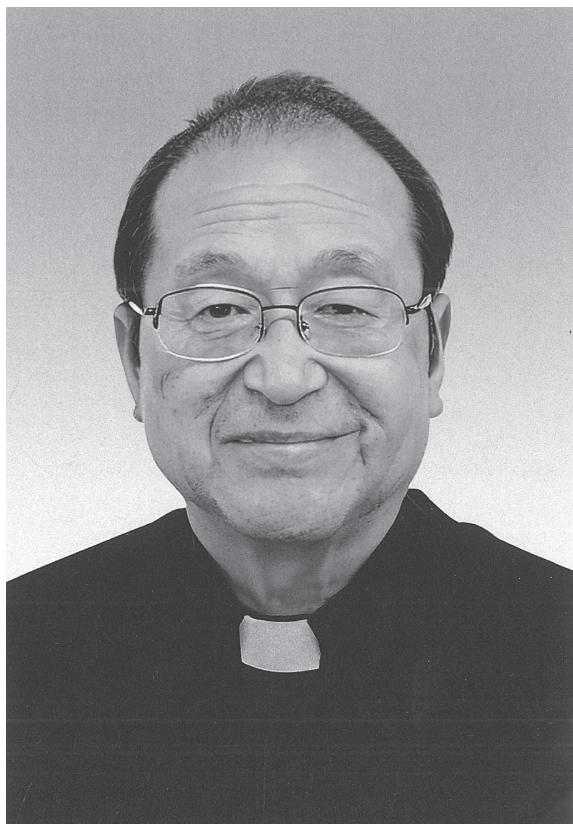
近年ペトロの家（東京教区司祭の家）で静養していらしたトマス・アクイナス川村昕司 神父様が8月18日（日）に90歳で御帰天なさり、ここに謹んで哀悼の意を表します。8月22日（木）に東京カテドラル聖マリア大聖堂で菊地功 大司教様の主司式により告別式ミサが捧げられ、参列し、天国での永遠の安息をお祈り致しました。

川村神父様はいやしのためのミサ（聖心女子大学聖堂にて8月、9月を除く毎月第二日曜午後二時）で長年、協力司祭として故・小平正寿神父様（フランシスコ会）、パウロ・ヤノチンスキイ神父様（ドミニコ会）、木寅義信神父様（マリア会）方等とご一緒にミサを捧げて下さいました。コロナ禍中、非公開型で担当月にミサを捧げて下

さり、公開型再開後パウロ神父様と共に二〇二三年十月までミサを捧げて下さいました。公開型ミサ後の個人別の祈りの時間帯には穏やかで優しいお顔で、ご病人やご家族のお話を耳を傾け、熱心に執り成しの祈りをして下さり、有難く存じております。

聖靈による刷新運動の全国大会や関東大会で海外からの招聘講師の神父様と共にごミサをお捧げ下さり、四谷の祈りの集いや初台祈りの集い等で聖靈による生活刷新セミナーで講話をなさつたり、参加者を靈的に導いていらっしゃいました。

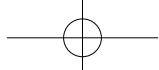
告別式の説教は晴佐久昌英神父様（東京教区）がなさり、自分が「司祭に叙階された直後に川村神父様が叙階のお祝いを述べながら『叙階のこの日を迎



トマス・アクイナス 川村昕司 神父

### 【略歴】

1933年9月1日	スイス連邦ベルンに生まれる
1934年1月1日	受洗（スイス連邦フリーブルク）
1962年3月17日	司祭叙階（麹町教会にて）
1962年4月～1964年3月	世田谷教会助任
1964年5月～1969年3月	本郷教会助任
1969年4月～1976年3月	高校生指導担当者
1976年4月～1981年3月	豊田教会主任
1982年6月～1984年4月	マニラ教区 日本人司牧担当者
1984年4月～1987年3月	関口教会助任
1990年4月～2000年3月	梅田教会主任
2000年4月～2001年3月	カトリック東京国際センター
2001年4月～2003年3月	目黒教会助任
2003年4月～2006年3月	多摩西宣教協力体協力
2022年3月17日～	ペトロの家
2024年8月18日	帰天



えられたのも「子供の頃に天逝した」弟さん「説教では実名」が天国で働いていたからだよ。」と言われ、天国で執り成しの祈りを川村神父様は『働く』と言

## ミサの中にある聖靈降臨の靈性

**畠基幸神父（御受難会司祭）**

「聖靈降臨の文化（靈性）」という題を「祈りの研修会」（八月二三日～二四日、秋葉原ハンドレッドスクエア）でいただきたおかげで、私の中で次第に「聖靈降臨の文化と靈性」とは何なのが見えてきました。そもそも「聖靈降臨の文化と靈性」とは何か？ 灵性は心の福音化を表し、文化は福音の社会的側面を表す。心の内なる活動の形が靈性であり、その外なる活動の形が文化になり生活スタイルに表現されると思います。

◆フランシスコ教皇は、現在「シノドス（共に旅する教会）」と強調し、進め方として「靈によ

る対話」を強調されています。また、「見て、識別して、行動する」方法論を使って、社会回勅（『ラウダート・シ』）や『兄弟の皆さん』で統合的なエコロジーを目指す地球規模のライフスタイルの見直しを呼びかけておられます。これは「聖靈降臨の文化と靈性」の具体化の摸索なのだと感じます。多様な文化や国民が一つの言語で、父である神に賛美と感謝をささげた聖靈降臨は、「多言語多文化の多様性の一致を実現する交わり」の靈性であり、キリストの教会の誕生の原点です。

◆このことは、百日共同祈願の新聞第5号で一気に展開しまし

う表現を使うのだと思いました。」というお話を伺い、とても印象的でした。神父様の言葉をかりれば、川村神父様はきっと天国で今まで関わった様々な人

のためには、下さっていると存じます。改めて感謝致します。そして主がかりれば、川村神父様はきっと川村神父様に天国での永遠の至福をお与え下さいますようお祈

り申し上げます。ご参考までにお知らせ。【いやしのためのミサの URL】は <http://home.a04.ifsc.com.net/ictus/hm.html> です。

の皆さん』の回勅の背景には、「聖靈降臨の靈性」があり、教皇様が「聖靈降臨の文化」に向かっているのではないかと気づかされたのです。

「聖靈降臨の靈性」や「聖靈降臨の文化」は、私の発案ではなく、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の言葉です。先述の百日共同祈願第5号ではシリル・ジョン氏の『聖靈に駆り立てられてー新しい千年期におけるカトリック・カリスマ刷新』（聖母文庫）から当該箇所を引用し掲載しました。「これほど希望に渴むる現代に、聖靈を知らせ、聖靈が愛されるようにしなさい。聖靈が愛されるようにしなさい。『聖靈降臨の文化』を生み出す人々の間に、愛のある親密さを手助けをしなさい。それだけが豊かになります。熱い思いで忍耐強く、決して倦むことなく祈

りなさい。「聖靈来てください！」と。更に、聖靈来てください！」と。更に、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は生涯最後の公式勧告として聖靈降臨祭前晩の夕べの祈り（二〇〇四年五月二九日）の説教の中で述べられました。「聖靈降臨の靈性が教会の中で、祈りと聖性と交わりと宣教の刷新された推進力として広まることを私は切望しています。」同教皇は、教皇職就任の直後（一九七八年十月十六日）からカトリック・カリスマ刷新の動きに注目し、教理省長官にラッチンガー枢機卿（後のベネディクト十六世教皇）教皇庁説教師にカンタラメツサ神父（後に枢機卿）を任命し、カトリック教会の伝統の基盤の下に、聖靈の働きとそのカリスマ刷新の運動を見守り、教会内の活力となるように願つておられたのです。その教皇が、大聖年への取り組みの中で、聖靈の年の一九九八年五月三〇日（教皇在位20年）聖靈降臨祭の日付で発布された使徒的書簡「主の日一日曜日の重要性」（



秋葉原の研修会場にて

中央協議会発刊）は、「聖靈降臨の靈性」を育む「主の日」の豊かさを歴史と意味の両面から解き明かしています。

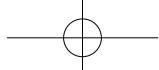
「記憶を呼び覚まし、あらゆる世代の信者に復活の出来事をもたらすのは聖靈です。それは、わたしたちを復活した主と結びます。そしてわたしたちの信仰をよみがえらせ、愛によつて心を満たし、わたしたちの希望を新たにします」（85項99頁）。

そして、「日曜日は週に一度の『盛大な祭儀』として、暮れることのないあの日曜日が来るまで、教会の巡礼の時間を定め続けるでしょう」（87項101頁）。

ここに「聖靈降臨の文化」の萌芽を見るのです。「文化」は「靈性」によって形作られていくます。形骸化したミサではなく、血の通つた生き生きとしたミサを祝うために、日曜日は、単にキリストの死と復活を記念するだけでなく、十字架の勝利のキリスト、復活された主が御父のもとから約束の聖靈を送り、信じる者の心を愛の火で燃え立たせ喜びで満たされる日です。上記28項には、「・・・復活した主と出会つた使徒たちの喜びをキリスト者が再び味わい、主の靈といういのちを与える息吹きを受けるとき、『週毎の復活祭』はある意味で『週毎の聖靈降臨祭』となるのです」と述べられています。27項に書いてあることなのですが、「日曜日」といつても何も感じませんが、英語でSundayは「太陽の日」を

意味します。異教のローマのカレンダーだったのです。しかし、主の復活は太陽の日で、太陽の光は「キリストの光」として、また太陽の炎は、「聖靈の火」として象徴されたのです。そして、「主」とは発音してはならない神の名「YHWH」を七十人訳が翻訳したときに使つた称号「主」を復活したイエスに当てはめました。「イエス・キリストは主である」（フィリピ2・11、使徒言行録2・36、一コリント12・3）と告白し、「安息日の後の第一日」を「主の日」と呼び、週毎に集まることが使徒たちの時代から始まりました。これがキリスト教文化の日曜礼拝の礎です。日曜日の文化が「主の日」の文化へ変容した歴史を思うとき、現在は「週末の休日となり、世俗のレジャーの文化になり、世俗のレジャーの休日となつたことに対しても、私は推測しております。

◆教皇は第三千年期を前に、日



曜日の根本的な重要性を再確認し、日曜日の秘儀、日曜日の祭儀の意味、キリスト者の生活と人間生活にとつての日曜日の重要性を再発見することが求められていることを何度も強調されました（同書簡1項と3項）。またそのために、第二バチカン公会議の教えを引用しています。「日曜日に、キリスト信者は一つに集まらなければならない。そして神のことばを聞き、感謝の祭儀に参加して、主イエスの受難と復活と栄光を記念し、彼らを『新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与えた』（ペトロ1・3）神に感謝をささげるのである（同書簡6項）と。

ミサを主日に祝うことの喜びを私たちは再発見しなければならないのです。同時に、「週毎の聖靈降臨祭」とは、何を意味しているのか。教皇は、聖靈による刷新の「祈り会」のことを考えていないのだろうか？ 司式司祭がないときに、集会祭に集まるのは、復活の日の記念

であることを何度も強調され、そのために、第二バチカン公会議の教えを引用しています。

「日曜日に、キリスト信者は一つに集まらなければならない。そして神のことばを聞き、感謝の祭儀に参加して、主イエスの受難と復活と栄光を記念し、彼ら

を『新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与えた』（ペトロ1・3）神に感謝をささげるのである（同書簡6項）と。



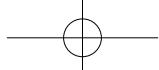
秋葉原の研修会場にて

古代の教会では、ミサが行われるのは司教のいる教会だけで、助祭が各小教区へ聖体を運んで信徒に配っていた。パンを裂いて杯に欠片を入れるのは、イエスの受難と復活を記念する主の日」とあるところに、とても新鮮な響きを感じました。通常

は、「日曜日はキリストの死と復活を記念する主の日」と言つていたので、「イエスの受難と復活と栄光」と「栄光」の印象は薄かつた。過越の神秘が「受難と復活」だけで「栄光」をあまり意識していなかつたことは、知つてもわからなかつた感じです。

◆ところで、聖靈による刷新に関しては、イブ・コンガール枢機卿というドミニコ会の著名な学者が聖靈の大書『わたしは

聖靈を信じる』（三巻本、サンパウロ刊行）を書き著わし、「カトリック・カリスマ刷新」の発展に関して、「小教区で受け入れられるならばであるが、しかし今ままのあり方では」（第二卷二一五頁）と否定的な評価をしている一方で、「福音の持つ意義を現実のものとして提示」しているためには小さな信仰共同体のほうが適していると評価しました。「テゼー」や契約共同体、基礎共同体や様々な運動体、すなわちクルシリオ、ファコラー、レ運動、ラルシユ共同体、マリッジ・エンカウンター、聖エジディオ共同体運動、新求道共同体など数多く誕生しました。それゆえに「刷新」は神がわれわれの時代に与えてくださった恵み」（同上二一七頁）であると結論づけました。この結論は、一九七九年のものです。ステーヌス枢機卿は、ご自身、レジオマリア運動の創立者ですが、これら的小教区を超える刷新の運動を「恵みの潮流」と呼び、国際カリスマ刷新の事務局を自身



の教区に設立して応援しました。歴代教皇の保護の下に「刷新」は成長し、フランシスコ教皇は、デュケイン大学の学生默想会で始まつた聖靈刷新運動の五十周年を記念して、この「カトリック・カリスマ契約共同体」とその仲間（C FCC F）と「国際カトリック・カリスマ刷新奉仕会（I C C R S）」の両者を「恵みの潮流」から生まれた一つの奉仕機関として統合し、二〇一九年六月・聖靈降臨の日に、教皇府内の「信徒・家庭・いのちの省（部署）」所管に組み込まれました。それが「カリス」です。中央協議会の「カリス」（Catholic Life Service の略語）は、教会の火災や災害の保険制度ですが、新しく発足した私たちのカリスは、「カトリック・カリスマ刷新国際奉仕会」の英語表記の頭文字を並べたもので、「恵み」を象徴します。このシンボルと活動については、小熊晴代さんが「生ける水」誌上で何度も報告しているので省略しますが、日本側の代表として「

カトリック聖靈による刷新全国コムニオ奉仕会」のコーディネーターとして身を挺して奉仕している姿に頭がさがります。

◆私たちの「カリス」は、聖靈降臨の靈性の普及を促進するため、三つの目的から成り立ちます。（一）聖靈による洗礼の普及、（二）エキュメニカルな活動、（三）貧しい人びとへの奉仕です。

フランシスコ教皇が、カリス創立の目的をこのように規定されたのは、「聖靈による洗礼」の普及によって、聖靈降臨の靈性が教会に培われることを願つてのことだと思います。教会は洗礼によって神の子となり新しい契約がここに刻まれていますが、それを想い起し、実践しなければ、在つてもいいのと同じになります。再び「それを燃え立たせる」（二テモテ1・6）ことが一番の目的なのです。「靈に満たされる」経験は、ルカ福音書と使徒言行録に描かれています。ルカによる福音書では、イエスご自身の体験としておける「賛美と感謝の集い」は

カトリック聖靈による刷新全国コムニオ奉仕会」のコーディネーターとして身を挺して奉仕している姿に頭がさがります。

◆私たちの「カリス」は、聖靈降臨の靈性の普及を促進するため、三つの目的から成り立ちます。（一）聖靈による洗礼の普及、（二）エキュメニカルな活動、（三）貧しい人びとへの奉仕です。

フランシスコ教皇が、カリス創立の目的をこのように規定されたのは、「聖靈による洗礼」の普及によって、聖靈降臨の靈性が教会に培われることを願つてのことだと思います。教会は洗礼によって神の子となり新しい契約がここに刻まれていますが、それを想い起し、実践しなければ、在つてもいいのと同じになります。再び「それを燃え立たせる」（二テモテ1・6）ことが一番の目的なのです。「靈に満たされる」経験は、ルカ福音書と使徒言行録に描かれています。ルカによる福音書では、イエスご自身の体験としておける「賛美と感謝の集い」は

聖靈が宣教の初めから、「靈」を注がれ、「靈」に導かれ、「靈」に満たされて御父との愛を目につける形にされた原秘跡であることが描かれています。使徒言行録においては、聖靈に満たされた母マリアの祈りと弟子たちの集まりの上に、イエスと同じように聖靈が天から降り、目に見える形でとどまり、聖靈に満たされ、神の偉大な業を賛美し感謝したのでした。

◆先に触れた、四十年前にドミニコ会士のイブ・コンガール師から受けた挑戦は、私のイニススピレーショーンでは、「カリスマ刷新の発展のためには、ミサや典礼との関連を示さなければならぬ」というものでした。

「聖靈降臨」の恵みから生まれて合体したものなのです。つまり、両者は共に「過越の神秘」を構成し、「賛美と感謝」の祈りそのものであり、教会の生活の座は、現在の共同体の集いそのものです。それは最後の晚餐を現在化すると同時に、いま参加している信者に聖靈がくだります。それは、まさに愛の共同体への聖靈降臨です。ミサ中に働く聖靈は、過越の神祕の聖靈降臨によるものです。これに気づくとミサが生き生きとしたものになるでしょう。

### 「生ける水」定期購読者の皆様への お知らせとお願い

十月からの郵便料金の値上がりに伴い、  
2025年度より年間購読料が送料込みで  
1,700円となります。何卒ご了承下さい。